
殺人者のたわごと、そして微笑 その4

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人者のたわごと、そして微笑 その4

【Nコード】

N4258J

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

資産家を狙った連続殺人事件が起こった。しがなというライター清田は事件を調べることになったが、偶然の出会いが彼自身の運命をも揺さぶることとなる。清田は犯人を突き止めることが出来るのか？物語はいよいよクライマックスへ、、、！

権限作：青木弘樹

清田は夜、田代の家を見張っていた。

今まで犯行が行われた時間帯はだいたい午後10時から11時の間らしい。ということは午後9時くらいから動き出していると推測した清田は、午後8時過ぎくらいからほとんど毎日、田代宅を見張っていた。

まったくの当てずっぽうだが、ライターの勘が清田を突き動かしていた。一応、下条にはおおまかなことは話していたが、証拠があるわけでもないの、下条もこれといった行動は取れなかった。下条自身もいろいろ仕事があるし。

3日、、、4日、、、時は過ぎていった。

「今日も動きはないか、、、」

しかし犯行が今度も夜行われるとは限らない。時間も、もっと早いかもしれないし、もっと遅いかもしれない。しかし、清田は執念で頑張った。

そして、7日、、、8日、、、時はただ過ぎていった。

「ふう、、、張り込みは退屈だな。警察も、、、こんな仕事してるのかな、、、」

なかなか現れない田代。しかし、10日目。ついに田代が動き始めた。

「あっ！」

午後9時半ごろ。田代が出てきた。帽子を深くかぶっている。手にはかばんを持っている。

「田代、、、！」

清田は気づかれないように、後をつけた。

しばらく後をつけてみると、田代はタクシーを止め、タクシーに乗り込んだ。

「やばい！」

清田は走ってタクシーを追いかけた。１キロほど走っただろうか、タクシーは信号に引っかかった。

「はあはあ、くそっ！」

その時、ちょうど目の前に空車のタクシーを見つけた。

「よし！」

清田はタクシーに乗り、運転手に告げた。

「はあはあ、すいません、あのタクシーを尾行してほしいんですけど」

「えっ？はあ、、、」

「あの、、私は探偵なんです。依頼を受けてまして」

清田はてきとうに嘘をついた。

「そうですか、、分かりました」

清田の乗ったタクシーは、田代の乗ったタクシーを尾行し始めた。しかし驚いたなあ。こんなドラマみたいなシチュエーション実際あるんですね」

「そ、そうですね、、」

「浮気調査か何かですか？」

「ええ、まあそんな所です」

２０分ほどして、田代の乗ったタクシーは止まった。このあたりは高級住宅街だ。

「あつ、運転手さん。見つかるはずなのでそこを曲がって車を止めてください」

「了解ですよ！探偵さん！」

どうやらこの運転手はノリのいい人物のようだ。清田の乗ったタクシーは、田代の乗ったタクシーから見えない位置に止まり、そして清田はタクシーを降りた。

「あの、じゃあこれ。おつりは要りませんから」

「そうですか。ありがとうございます。じゃ、頑張ってくださいね！探偵さん！」

「え、ええ、」

これが浮気調査なら気も楽だが、相手は人殺しかもしれないのだ。知らぬが仏とはまさにこのことだ。

清田はゆつくりと歩き出した。あたりに人はいない。清田は見つからないように壁に隠れ、そっと田代のいるほうを見てみた。

田代はなにやら持っていたかばんをあさっていた。そして何かを取り出した。

「、、、、！」

なんと田代はサングラスをかけ、マスクもつけた。そして手袋も。

「あ、あいつ、、、やっぱり！」

そしてもう一つ、何やらタオルでまかれたものを取り出した。

「あれは、、、凶器の包丁、、、か！？」

そして田代は、ある豪邸に向かった。

「、、、、」

清田は気づかれないように近づいた。

田代は壁を乗り越え、豪邸の庭に侵入した。

「くそ！どうする？」

清田は考えた。そしてとりあえず下条に電話をした。

「はいもしもし、下条です」

「あ、下さんですか？俺です。清田です」

「おお。まこと。どないしたんや？」

「すいません、夜遅くに」

「何言うてんねん、まこと。まだ10時すぎやで。それに新聞記者にとつては24時間、早いも遅いもないで」

「そ、そうですね。そんなことより大変なんです」

「どないした？えらいあわててるな」

「前に話した田代って男なんですけど」

「おお。その男がどうした？」

「ええ。あれからあいつの家を張り込んでたんですけど、いまさっき怪しい動きがあつて、それで後をつけてたんですけど、ついさっきある豪邸に忍び込んだんです」

「なんやて？ほんまか？」

「はい。○○地区の高級住宅街です」

「○○地区か、、あそこは金持ちがいっぱい住んどるな」

「はい。それで下さん警察に知り合いとかいますよね？連絡して連れて来てほしいんですが、、」

「よっしゃ。分かった。詳しい住所分かるか？」

「えっと、、詳しい住所か、、」

清田はあたりを見渡した。

「すいません。詳しい住所は分かりませんが、その男が忍び込んだ家の表札には城之内と書かれています」

「よっしゃ。こつちで調べるわ」

「すいません」

「まこと、くれぐれも危ないことはするなよ。すぐ警察と一緒にわしも行くからな」

「分かりました」

清田は電話を切った。

清田はしばらく静観していた。家に入るわけにもいかない。かといって犯行が行われるのをただ待っているのもつらかった。

静まり返る住宅街。空を見ると月は美しく光っていた。

「下さん、早く来ないかな、、」

その時！

「わあああ！」

小さな悲鳴が聞こえた。こんな豪邸だ。防音も優れているのだから。しかしそれが返って犯人にとっては好都合になる。皮肉なものだ。

「ま、まさか、、」

清田の心臓の鼓動は早まった。

数分して田代が出てきた。

「、、、」

田代はかばんを手に、少しあたりを見渡したあと、ゆっくり歩き出した。

（どうする？このまま見過ごすわけにはいかない、、、！）

清田は意を決して、声をかけた。

「お、おい！」

「！？」

田代は振り向いた。

「お、お前、田代だな？」

「、、、？」

薄暗いので、田代は清田だということに気づかなかった。

「俺は清田だ。お、お前、、、ここで何をしている！？」

「清田、、、」

田代はサングラスだけを外した。そして清田を見つめた。

「あんた、、、こんな所で何をしている？」

「そ、それはこっちのセリフだ。お前、、、まさか、、、」

「くくく、、、そうか。やっぱりバレたか」

「なに！？」

「俺の悪い癖だ。言いたがりの俺の悪い癖。いい加減、直さなきゃな」

「、、、」

「しかしよく見つけたな」

「お前を、、、ここ数日間、見張ってたんだ」

「へえ、、、あんた探偵ごっこもやるのかい？」

「俺は、、、はっ！」

清田は田代に少し近づき気づいた。顔や体に返り血を浴びている。

「お前、、、やっぱり、、、」

「くくく、、、まあ、見られたからには仕方ない。あんたにも死んでもらうしかないかな」

「くくく」

田代は『あんたにも』と言った。それはつまり今誰かを殺したということだ。

「田代、落ち着け、くくく！」

「俺はいたって冷静さ。落ち着いてないのはあんたのほうじゃないのかい？ライターさんよ」

そう言つと田代はかばんから包丁を取り出した。包丁には血がついている！

「くくくくく」

田代は構えた。

「大丈夫だ、心配するな。ひと思いに殺してやるからよ」

「田代、くくく」

「死ね！」

田代が襲いかかつていた！あいにく清田は武器になりそうなものは何も持つてきていなかった。

「くくく！」

防戦一方の清田。

「つたくくく、年寄りのくせにしつこいな、ライターさんよ」

「はあはあ、くくく、お前こそ、若いくせに動きが鈍いぞ」

清田はあえて挑発した。

「この！」

田代はさらに襲いかかってきた。

「くくく！」

清田は、二の腕のあたりを少し切られた。

「うわっ！」

「へへへ、くくく」

不気味に笑う田代。その時、

”ウー、くくく”

遠くのほうからサイレンの音が聞こえた。

「来た！」

清田は小声で言った。田代も気づいたようだった。

「警察を呼んだな？」

「、、、」

「くそっ！」

田代は逃げ出した。

「待て！」

追いかける清田。しかし田代は武器を持っている。あまり近づけない。その時、道端にコーラの空き瓶が落ちてるのが見えた。

「これだ！」

清田はコーラの空き瓶を拾い、田代の背中に投げつけた。

”ガシッ！”

「うわっ！」

田代はひざを突いた。その時、

「うわっ！」

清田は石か何かにつまづき、転んでしまった。

「つつ、、、」

清田は起き上がろうとした。しかし、

「！」

目の前には冷たい視線で清田を見る田代が立ちはだかっていた。

「清田さん、、、終わりだよ」

「うつ、、、」

清田は動けなかった。そして一瞬、木下のことを思い出した。

（俺は、、、ここで死ぬのか、、、）

「死ね！」

田代は包丁を清田めがけて振り下ろそうとした。その時

”パンッ！”

「うわっ！」

拳銃の弾が、田代の腕に命中した。包丁は地面に転げ落ちた。

駆けつけた刑事が拳銃を発砲したのだ。そしてパトカーが数台やってきました。

「まこと！大丈夫か？」

ある一台のパトカーから下条が降りてきた。

「下さん、」

そして数人の警察官が田代を取り押さえた。

「まこと！怪我はないか！あつ！血が出とるやないか」

「ええ、でも大丈夫。かすり傷です」

「おい！誰か救急車を！」

「へへへ、、どっちかっていうと転んで打撲した所のほうが痛みます。やっぱ運動不足は駄目ですね、、」

「分かった。もう喋るな。もう心配ないからな」

「ありがとうございます、、」

田代はかねんしたのか、あばれたりしなかった。

間もなくして救急車が来た。

清田は救急車に乗せられた。田代はパトカーに乗せられた。

こうして、事件は一応の解決を迎えた。

その5（ラスト）へ続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4258j/>

殺人者のたわごと、そして微笑 その4

2010年10月8日15時22分発行